

## 2015年5月 ATIS 臨時総会および例会

今月は、キヤノン本社の会議室において、臨時総会と例会が開催されました。参加者は90名を越える盛況なものとなりました。臨時総会では、ドコモ・テクノロジー株式会社の正会員入会およびオリンパス株式会社の特別賛助会員入会が承認されました。また、例会では代表幹事報告に引き続き、シンポジウム（パネル討論）と講演が行われました。

パネル討論は、テーマ「中国特許文献を使用した特許調査の課題とその対応の検討」と題して、コーディネータを東芝テクノセンター社長津田義明氏が務め、パネラーとして4名の方に登壇頂きました。

最初に特許庁総務課特許情報室長補佐櫻井健太氏から、中国語特許が世界出願の約60%を占める状況となった中で、グローバル出願の増加、海外審査の迅速化、審査品質の維持・向上等の達成に向けて、特許庁の基本計画での取り組みの一端として、中国特許の和文抄録、FI/Fタームデータ作成、中韓文献・検索システム、機械翻訳精度向上の取り組み等を紹介頂きました。

次に富士通テクノロジーリサーチ社長中村三知男氏から、調査業務を実施する視点から先行調査、クリアランス調査、テーマ動向調査、有効性確認調査における中国文献調査の現状の紹介を頂きました。課題として、文献翻訳精度や特許分類付与未整備による抽出精度、生死情報などの「信頼性」と、費用対効果など調査の「必要性」が提示されました。

三番目にレイテック社長出口隆信氏は、中国特許文献サービスを提供する視点から中国における知財訴訟件数の増加、出願特許は量から質へ転換、権利維持の状況等中国特許の状況や日本企業の中国特許調査に対する認識が紹介されました。課題として、データベースの未整備、翻訳精度が挙げられました。

最後に北京三友知識産権代理有限公司呉学鋒氏からは、中国事務所の視点から中国特許出願状況、出願の特徴、中国の技術や市場の発展の紹介とともに、中国事務所に依頼するメリットについて紹介を頂きました。

パネラーのプレゼン後、コーディネータの進行で「生死情報を含む調査の信頼性」「調査の必要性」など課題を絞り、質疑応答で議論が深められました。多くの会員からは理解が進んだなど好評の言葉を頂きました。

次に、テーマ「『生きる意味』の不況を超えて」と題して東京工業大学リベラルアーツセンター長上田紀行教授による講演を頂きました。

今の学生には「コミショウ(コミュニケーション障害者)」が多く、人の話を聴くことが弱い、知識幅が狭い、自分で問いを立てられない、人生で脱線したらどうしたらよいか分からないなどの特徴がみられるそうです。戦後の日本では、「どのような社会を目指すか？」はほとんど問われませんでした。世界トップ10を目指す東工大が真のリーダー人材を輩出するための課題もここにあり、大改革準備の紹介に始まりました。

本題に入り、現在の社会に起こっている具体的な事例紹介が続きます。

日本には多くの仏寺があるが、どれだけ困っている人々に貢献できているのであろうか？「頑張れ仏教」と称する若手の坊さんを集めた将来を考える活動、講義での「もし、赴任先である海外工場で環境汚染問題を発見した場合、君はどう行動するのか？」との問いに、「何もしない」と

判断する学生が多数派であった衝撃、また、チェルノブイリ事故後、放射能漏れ抑止のベントフィルタ設置の対応において日仏の差異も紹介も頂きました。

これらの事象はリンクしているそうです。2000年代になり人材さえ使い捨てといわれるような第三の敗戦ともいべき状況が現れ、多くの人々は将来に対する不確実さを増しており、また企業倫理、コンプライアンスなど根本的に今失っているものが根底にあるとの示唆です。

次に、答えのヒントとなる事例が紹介されました。

女子大生が大変な苦しみの中にあつた時、真夜中でも解放されていた教会で朝まで数時間座っていたら心が休まった。「もう一人の自分が頑張れば何処かに支えがあり、かつ自由になる」との心境に至つたという。すなわち、何か「支え」があれば、自由にものを言えるし、行動もできる。逆に、「人の目や評価」が縛りとなっている。今の日本には、「支え」が本当に少なくなつてしまつているのです。

また、「理想相手はお釈迦の様な人」という信念を持っていて、なかなか結婚できないでいた方の紹介では、人間としての「徳」と経済的な裕福さからの「徳」の二面性を強調されました。今の日本では高度経済成長の成功に伴って、経済的裕福さに価値や評価の重心が偏つてしまいました。韓国、中国、米国および日本、各国の優秀さの自己評価比較データでは、日本が著しく評価が低く、「優秀さ」がほぼ「学業の優秀さ」と単視点で解釈されていることが示されました。今、社会人となつても会社単線ではなく、会社以外の逃げ場を持つことが重要となることを強調されました。

最後にダライ・ラマのエピソードの一端にも話が及びました。縁起の考えとして、どんな状況でも良き種を蒔く幸せ、いつか何処かで誰かの役に立つという信念、人間を活かす術、先人の技術の尊重など、示唆に富むキーワードがいくつも飛び出しました。

先生の講演は、自己体験を踏まえ具体例をもって次々と展開した。どんどん引き込まれる興味深い内容であり、今後の人生の生き方、会社での行動のあり方など示唆に富むものでありました。

なお、詳しくは主著である『生きる意味』（岩波新書）、最近の著書である『人生の〈逃げ場〉』（朝日新書）、『パツとしない私が、「これじゃ終われない」と思ったときのこと』（幻冬舎）、また『ダライ・ラマとの対話』など多数の著書が参考となります。

